

考慮すべき社会の現状・変化

※ 県総合計画に応じて変更の可能性あり

全国的な状況

〔現状〕

- ・人口減少・少子高齢化・過疎化の進行
- ・人生100年時代による学習ニーズの多様化
- ・成人年齢の18歳への引き下げ
- ・AIの進化等の技術革新
- ・グローバル化の進行、SDGsの達成に向けた取組の広がり
- ・新型コロナウイルス感染症等の新型感染症の影響を踏まえた社会の変化
- ・大規模自然災害の多発

〔30年後に予想される姿〕

- ・更なる人口減少、少子高齢化
- ・Society5.0の到来による職業や生活の変化
- ・地球温暖化や食料の逼迫等の世界規模で解決すべき課題の深刻化の可能性
- ・世界経済における日本のプレゼンスの低下

福島県の状況

〔特徴・現状〕

- ・全国3位の県土の広さ
- ・はま・なか・あいづに代表される地域ごとの多様性、豊かな文化
- ・東日本大震災からの復興・創生

〔30年後に予想される姿〕

- ・廃炉や帰還困難区域の解除、再生可能エネルギーの導入推進等復興・創生に向けた取組の継続
- ・更なる人口減少、少子高齢化による就業者数の減少や過疎化等による地域コミュニティの衰退のおそれ

東日本大震災からの復興・創生の過程を振り返って

- ・東日本大震災からの復興・創生の過程で、困難な中でも前を向くレジリエンスや助け合う精神が生まれるとともに、県内外とのつながり、対話と協働の文化、福島イノベーション・コースト構想等による新たな産業等が創出されてきている
- ・心のケアが必要な子どもの増加、外遊びの自粛による体力低下、避難地域の子どもの減少等様々な課題が生まれたが、それを克服するため、課題そのものを学びとする探究活動や風評を払拭する観点からのGAP教育、極少数規模のデメリットを克服する遠隔合同授業、自分手帳による健康マネジメント力の育成等先端的な教育活動が生まれてきている

AIの進化や感染症対策の中で見えてきた学校の意義

- ・感染症対策の観点からの長期の臨時休業によって、学力や体力の低下、精神的な影響、共働き家庭の子どもの居場所の不足、給食がなくなることによる栄養面の心配、虐待等様々な懸念が生じた
- ・学校は学力保障だけでなく、人とのつながりや体験を保障。セーフティネット的役割も担っている
- ・一方通行の授業は、オンデマンド授業に代替できてしまうからこそ、体験、コミュニケーション、子どもに伴走し個性を引き出す教師の存在等が学校の強み
- ・このような学校の強みを最大限発揮していくことができるように、学びや学校の在り方を変革していくことが必要

今後目指すべき教育の姿（これまでの意見の整理）修正案

福島県の教育の主な現状・課題

	プラス要因 (Helpful)	マイナス要因 (Harmful)
内部環境 (主に教育環境)	強み (Strength) <ul style="list-style-type: none"> ✓ 自分で計画的に家庭学習に取り組む児童生徒が、小・中学校ともに全国平均を上回り、経年でも継続的に増加傾向 ✓ 近隣の学校と成果や課題等を共有している学校が多い ✓ 児童生徒の問題行動、退学者数、少年犯罪件数が少なく、他県と比較して生徒指導の面で落ち着いている ✓ 自分の身の回りのこと(基本的生活習慣)ができる子どもが多い ✓ ふたば未来学園やふるさと創造学、GAPなどこれまでにない未来創造型の復興教育、公立私立それぞれによる高校等の魅力化が進展 ✓ 震災があったからこそ芽生えた子どもたちのマインド(意欲、感謝の気持ち、地域への貢献等) 	課題 (Weakness) <ul style="list-style-type: none"> ✓ 算数・数学、英語が苦手である傾向 ✓ 中学数学と英語においては好きと答える生徒が少ない ✓ 全国学力調査の記述式活用問題における無回答率が全国に比べ高い。特に中学数学、中学英語 ✓ 学力が低い層(正答率40%未満)が多い ✓ リーディングスキルが低い子どもたちの存在等の学力の課題 ✓ 自分の考えをうまく伝えるよう工夫して発表する児童生徒の割合が、中学校で減少することに課題 ✓ 難関大学進学率が低く、微減傾向 ✓ 震災等を契機とした心のケアが必要な子どもがいまだ存在し、不登校児童生徒数も増加 ✓ ICT環境整備の遅れ、教員のICT活用指導力の低さ ✓ 在校時間の基準を上回る教員の存在、多忙化解消
外部環境 (主に社会環境)	機会 (Opportunity) <ul style="list-style-type: none"> ✓ 震災を機にできた他地域の人々とのつながり ✓ 福島イノベーション・コースト構想での、県内全域における人材育成の取組の波及や、再生可能エネルギー推進、ロボットテストフィールドなどの新たな研究開発環境の整備 ✓ 新型コロナウイルス対策で見えてきた社会全体でのオンラインの可能性 ✓ GIGAスクール構想の急速な進展 ✓ 文化財の有効活用に向けた法整備 	恐れ (Threat) <ul style="list-style-type: none"> ✓ 一部改善が見られるが肥満傾向児の割合増加 ✓ 家庭教育を取り巻く困難な状況 ✓ 地域のつきあいの希薄化 ✓ 過疎化や少子高齢化の加速 ✓ 避難地域の人口減少 ✓ 雇用のミスマッチ ✓ 風評と風化 ✓ 子どもの貧困、経済的格差 ✓ スマホやインターネットの急速な浸透による情報モラルの欠如等が原因のトラブル ✓ 教員の大量退職と教員志願者の減少傾向

今後目指すべき教育の姿（これまでの意見の整理）修正案

今後目指すべき教育の姿

○育成したい人間像

急激な社会の変化の中で

自分の人生を切り拓くたくましさを持つとともに

多様な個性を生かし、対話と協働を通して

社会や地域を創造することができる人

○育む力：AIには代替できない、自己、他者、社会と向き合う上で必要となる力

- ・自己を客観的に分析・評価した上で、自己肯定感や自己有用感をもつとともに、自己の課題を主体的に解決するために、自ら学び続け、自己管理し、自己決定することができる力
- ・他者に対して謙虚さと寛容の心を持ち、対話するために必要なコミュニケーション能力や読解力を備え、他者との違いを乗り越えて協働することができる力
- ・社会の課題に対して主体性や当事者意識をもって粘り強く向き合い、膨大な情報の中から必要な情報を選び取り、前例にとらわれず挑戦し、新たな価値、産業、文化を創造していく力



○福島県が取り組む教育の姿：「ふくしまならではの」教育

- ・「ふくしまらしさ」(※)を生かした、グローバルとローカル、デジタルとアナログ、学校と地域、総ぐるみによって多様性を力に変える教育
- ・福島で学び、福島に誇りをもつことができる教育(「ふくしまを生きる」教育)

(※)「ふくしまらしさ」とは

- ・世界の課題を先取りする東日本大震災からの復興・創生等の課題に対し、課題先進県だからこそその課題解決学習を通して、福島から世界共有の課題に挑戦する当事者意識を持った子どもを育成する
- ・東日本大震災からの復興の過程で生まれた強み(困難の中でも前を向くレジリエンス、「対話と協働」の文化、遠隔合同授業等の先進的な教育)を福島の財産として共有する
- ・はま、なか、あいづを代表する多様性が交流し合う